

からあげが実る木

真光寺中学校 二年

羽鳥 はとり
柚生 ゆずき

世の中では今、物の値段が上がっている。食べ物でも値段が上がっている。

そんな時代の中、「家」では食費を抑えるため、ある一本の木を育てることにした。

それは「からあげが実る木」だ。そのまま木にからあげが実るだけだが、枯らしてしまうと腐る。だからさ、毎日ていねいに育てなければいけない。一本十万円するらしい。

今日は父、明日は母、と世話する当番を決める。美味しく食べるためには面倒臭いが頑張らなくては。

でも、毎日食べていると飽きる。毎晩食卓にからあげがある。母は「少しでも食費を抑えたいの。我慢して食べなさい。」という。

確かに、家のためではある。だけど三百六十五日夜ごはんにからあげが出るのは嫌だと、思っていた次の日にとんでもない事件は起こった。

朝、父が木を見に行くと、木が枯れていた。

「おい、木を枯らしたヤツは誰だ。」と、父は怒鳴った。父は、私の弟をにらんだ。

昨日の当番は、私の弟だ。弟は「そうだよ。僕が木を枯らしたよ。」と言った。父も母も、怒りながら枯れて腐った木を処分した。

でも私は正直嬉しかった。やっとこれだからあげを食べなくて良い。弟も怒られながらもニヤニヤしている。きつと嬉しいんだ。

昼間、弟とおつかいに行った。木を枯らした件について聞いてみたら、弟もからあげに飽きたから枯らしたそう。二人で嬉しくなりながら、家に走って帰った。

家の庭をチラッと覗いたら一本の木が立っていて、枝の先に「とんかつ」がたくさん実っていた。

ことばらんど賞
羽鳥柚生「からあげが実る木」

審査員講評

一見ポップな世界観ですが、実は絶妙なバランスで皮肉がきいています。救世主のようにやってきた家電が実は不便で結局割高になったり、好きだと思っただけの子どものために準備したものが本人的にはうんざりだったり。そんな実体験と重ねて読みました。語りすぎずコンパクトにまとまっていて、現代の寓話のようです。

—— 藤岡 みなみ